第三節　未熟 /childhood

「……どうしようかねえ、クロニク」

『どう、しましょうかね。お父様』

無機質なクロニクの声さえも今はどこか呆然としたように。

父子揃って頭を抱える彼らの目線の先には、先日弟子入りした雪仔――ザイシャ=アンディライリーの小さな体躯があった。

浅く息をするザイシャの周りには血痕が飛び散り、暴走した魔力の逆りが片腕とともに地面を吹き飛ばしてクレーター状に地面を抉っている。

――――リバウンド。

魔術式の制御に失敗した場合に発生する魔力回路の暴発。正しく歪められるはずの世界が変化を拒み、その代償として行き場の無くなったエネルギーが回路を遡る。そして、針を刺した風船のように脆弱な部分から圧力は抜け出ようとする。

破裂。

ザイシャのそれはリバウンドによって生じる結末の典型であった。

勿論、こんなことは見習いにとっては初歩の初歩。ロォストの神童と呼ばれたボルチェイブでさえもリバウンドの経験は何度かあったし、腕が吹き飛ぶなど日常茶飯事。怪我したばかりなら治すのも仔細ない。

老人らの反応はザイシャの怪我に向けられたものではない。

問題は、このリバウンド現象を引き起こしたのが基礎中の基礎と断言しても良いだろう強化魔術だったことである。リバウンドは見習いにとっては初歩の初歩といったが、逆説的に基礎魔術でのリバウンドというのは見習いどころか素人一歩半くらいで卒業するものなのだ。

『とりあえず、腕を縫合して地面に埋めてみますか？』

「そうしてみようか……」

要するにである。

ザイシャは魔術師にも関わらず魔力制御がド下手くそだった。

それはもう、本当に。

□□

話は、その日の朝まで遡る。

老魔術師の元に弟子入りするとザイシャが決断してから実に二週間後のことだった。

ささやかな朝食を終えたボルチェイブは、まだ眠気の残る顔でナメクジのようにゆっくりと咀嚼を繰り返すザイシャに話しかけた。

「さて、ザイシャ。君が私に弟子入りして七つの夜が明けた。どうだい？　そろそろ傷も完治してきたんじゃないかね？」
「ん……？　もむ……もむ……こくり」
やや遅れて、ザイシャは相変わらず眠そうな目で口の中の物を飲み下す。
「……そう、だな。一番深い傷はもう開きそうにないし、他の傷もあらかた治ってしまった。うん。これなら動き回っても問題はなさそうだ」
二日ほど前から血が滲まなくなってきた包帯を見ながらザイシャは嬉しそうに頷く。
本来は身体を動かしているのが性分なようで、老人のベッドで安静にしていた頃、特に傷の痛みがなくなってきた頃には大変つまらなさそうにしていたのは老人の記憶にも新しい。
数日前からはクロニクの操る人形の目を掻い潜り、こっそり軽い家事をしようとするもののクロニクに見つかってお小言を言われている風景が常になっていた。
と、そんな確執があったせいだろうか。
『月雫箱』に光が灯り、念話ではなくスピーカーモードで聞きなれた無機質な、それでいてどこか皮肉気な声が漏れ出す。
『そうでしょうか？　普通の人間なら問題はないでしょうがあなたは雪仔。雪のように脆いのですから。あと七つの夜が明けるまでは、寝ていたほうがいいと思いますよ。ほら、考えても見てください。折角、お父様が弟子に取ったあなたが基礎すら叩き込まない間に斃れるなどと笑い話にもなりませんよ。どうです？　あなたもそう思いませんか、雪仔？』
「む……！」
その声を聞いた途端にザイシャは渋面になって『月雫箱』をキッと睨んだ。
「うるさいぞ礼装！　そういう君こそ人の身体を持っていないではないか！　雪仔雪仔と莫迦にするな！　私だって、アンディライリーでは雑事の一切を預かっていたのだぞ！　君の言うほど私の身体は脆くはない！」
『はん。拾われ子の雪仔が仕事を押し付けられていただけでしょうに』
「なんだと……！」
また始まった、と老魔術師は眉間の皺を指で摘む。
ザイシャを助けた日。その思考を誘導するために冷たく当たっていたクロニクだったが、そのように雪仔を扱った一因には単純に馬が合わないという理由もあったようで、何かにつけて言い争っていることはこの二週間の内でも頻繁に見られた。
ボルチェイブも寂しい老人。多少賑やかになるのは嬉しいくらいだが、厄介なことに二人の喧嘩はボルチェイブが仲裁に入るまで終わった試しがまるで無い。一度もない。
説得の言葉のストックが切れたわけではない。七百歳オーバーの老獪な智慧はまだまだ天井知らずに在庫を残しているのだが、それでも、このやり取りが生涯、自分が生きている限りは続くのだろうと思うと少し気が遠くなるのが老魔術師の正直な感想であった。

いつの間にか貴殿という二人称がクロニクに対してのみ君に変わっているのは、ザイシャがクロニクに敬意を払いたくもないことの表れなのか、はたまた喧嘩するほど仲が良いとの言葉通りに少しは互いに打ち解けているだけなのか。

「礼装！」

『雪仔』

「礼装！！」

『雪仔』

きっと後者だろう。

終わらない礼装と雪仔の押収をバックコーラスにしながら、そう思うことにした。

思いたかった。

「はい！　ストップ！　ストップ！」

手のひらから零れ落ちそうな希望から目を逸らした老人は二人の喧嘩を止めに入る。

すると、彼の言葉を待っていたかのように二人の言い争いはピタリと止まった。

ストップ、という言葉は本来この時代には存在していないためボルチェイブの写し身であるクロニク以外には通じないはずのだが、喧嘩を止めに来る老魔術師が毎度のようにその言葉を口にしていただろうか。ザイシャも、『喧嘩を止めろ』という意味の言葉として解していた。

老魔術師が犬の躾のようだと面白がっていられたのは最初のうち。日に日に、それこそ現在進行系で静止の命令は必死な物へとなって行っていたのだが、それはまあ、別の話である。

「とりあえず、話を戻して、いいかね？」

吸血なし、かつ全力で声を張り上げたせいかゼイゼイと息切れを起こしている老体。

やっとのこと紡ぎ出した言葉にも息切れの影響が残っている。

そんな、必死の形相の声に『月雫箱』は黙り込み、ザイシャは気まずそうに頷いた。

「よし……。ああ、すまない。ちょっと息を整える。すぅ……ふぅ……。これでよし、と」

なんとか平静を取り戻したボルチェイブは瞠目していた目を開いて本題に移ろうとする。

「二度目だが。さて、身体が治った、ということで私もやっと師匠らしいことが出来るようになったというわけだ。簡潔に言えば今日から君に魔術師としての鍛錬をしてもらおうと思う。だが、その前に確認したいことがあってね」

「確認？」

「ああ。テスト……じゃない。力試しだね。君が魔術師としてどれほどの力を持っているのか知りたい。それによって教える起点も変われば速度も変わる。つまるところを言えば、師匠として弟子の実力は把握しておきたいというわけさ」

「なるほど。それでは、私は何をすれば良いのだロォスト殿？」

「そうだねえ……。じゃあ、まずは基礎の強化魔術から見せてもらえるかい？　クロニク、裏から薪を持ってきておいてくれ。この子の魔術を試させる」

老魔術師がそう命じると、『月雫箱』がその幾何学模様を輝かせ、小屋の隅に崩れるように置かれていた木偶人形の一体がガチャガチャと起き上がった。
『承りました。お父様』
冷たい声が一言。許諾と共に関節をガチャガチャと賑やかに鳴らしながら木偶人形は小屋の裏にある薪置き場へと向かっていった。
「準備が終わり次第、と言っても持ってくるだけだからすぐに始めることになるだろう。心の準備をしておきなさい」
老人がにこやかに言うと、ザイシャはなにやら言いにくそうな顔で、
「あの、ボルチェイブ殿。少しよろしいか？」
「ん？　ああ、心の準備というのはあくまで言葉の綾だ。魔術師たるもの冷静であるべきだからね。私も君が失敗するなんてこと思っちゃいないさ」
「いや、そうではない。そうではないのだ」
目を泳がせながらザイシャは続ける。
「その……力試しは外でやりたいんだ。ええと、ほら。木くずを落とせば礼装がまた神経質に掃除を始めるだろう？　なんというか、そういう気遣いは大事だと思うのだ。うん」
「……？　まあ、別に構わないが」
そして、その数分後。
意を決した表情で強化魔術を使おうと試みたザイシャに続いた三景。
リバウンドによる爆発。
吹き飛ぶ腕。
血染めのクレーター。
それらを前にして、老人はやっとザイシャの真意を知ったのであった。

□□

『まさか、本当に七夜も延長になるとは思いませんでしたよ。雪仔』
翌日、魔術刻印による再生能力と霊地に埋められたことによる魔力の増幅により、なんとか片腕を繋いだザイシャが目を覚ますなりクロニクの皮肉が突き刺さった。
クロニクの言うとおり、運動厳禁絶対安静を固く言いつけられたザイシャは二週間寝ていたベッドに逆戻り。傷が治り、腕のリハビリが終わるまでの一週間は修行もお預けとなった。
「……今度こそは、出来ると思ったんだ」
『出来てないじゃないですか』
「うぐっ……」
拗ねたようなザイシャの呟きを即座にクロニクは切り捨てた。

無感情ながらどこか呆れたような声でクロニクは続ける。
『それで、あなたの師、もとい父である先代アンディライリー当主のレグゼがあなたに魔術を殆ど使わせなかったというのは事実ですか？』
「……本当だ」
『月雫箱』のそっぽを向くように、ベッドの上から壁側を見つめるザイシャはやはり拗ねたように呟いた。
「だが、それは父のせいじゃない。私は昔からこういうのが苦手で……。父が言うには、私の保有魔力が多すぎるせいだと。だから簡単に制御が途切れてリバウンドを起こしてしまう。故に、父のいないところでは魔術を使わないように言いつけられていたんだ」
『……なるほど』
納得したような色が無機質な声を染める。
『道理で十年……失礼。十の春を越した魔術師のあなたが、ここまで未熟だったわけですね。元より家督を受け継ぐ権利のない雪仔。レグゼがあなたに魔術を教えること自体が褒められたことではありません。彼があなたを指導できたのは道楽のように短い時だけだったでしょう。更に言えばあなたも雑事を押し付けられていたのですから、おそらく、あなたの魔術師としての経験は一つ春を越した魔術師のそれにも届いていない』
「……」
『沈黙、ということは私の算出結果は正しかったようですね』
クロニクの淡々とした言葉を最後に静寂が二人の間に立ち込める。重苦しい沈黙に覆われたザイシャはその重みに耐えきれないように、抱えていた膝の間に顔を伏せた。
「……失望、したか？」
ぽつりと、ザイシャの声が静けさを破った。
「あれだけ偉そうなことを言って、結局私は一人では強化の一つ使えない。君の言う通りさ。私は責任を背負う資格もない無力な雪仔だ。皆が私はアンディライリーを継ぐに相応しくないと言ったのも当然のことだよ。……そうだ。何を、夢を見ていたんだ。私が雪仔ということに代わりは無い。皆に受け入れてもらう？　家族になれる？　出来るわけがないだろう！　最初からわかっていたじゃないか！　ああ、本当に。……なんて、無様だ。滑稽極まりない。いつの間にか信じたふりをして、……父上だって、レグゼ様だってどうせ――――」
『失望、ですか』
割り込むように。クロニクが鼻で笑うような音を立てる。
『思い上がらないでくれませんか。初めからあなたに期待などしていません。私にしてみれば雪仔、あなたはお父様が老いの暇を晴らすために迎え入れた手慰みのひとつに過ぎない。失望どころか、むしろ安心さえ覚えましたよ。お父様の背負い目指した崇高な命題を受け継ぐなど何人にも適わぬことだとわかりました。感謝しましょう、雪仔。やっと諦めがつきました』

吐き捨てるように『月雫箱』の灯りが消える。
一人、無音に取り残されたザイシャは、村の滅びを知ったあの日のように小さくその身体を震わせ続けていた。

□□

『と、いうのが雪仔の現状です』
村外れに位置する老人の小屋から更に万歩ほど踏み入った森の中にその荒屋は建っていた。
これはかつてボルチェイブの吸血衝動が今よりも激しかったころに住んでいた最初の家だ。今の小屋は晩年に作った第二のものである。若い頃の彼は隙間風や人の出入りなどについては特に気にしていなかったため新居よりも随分と雑な作りだが、死徒である老人一人が暮らすには十分だった。
さて、そんな旧い住処には人影が二つ。老魔術師ボルチェイブ=ロォストとクロニクが送り込んだ木偶人形の姿がひび割れた雨戸の隙間から見えていた。
木偶人形は簡素な作りの椅子に倒れ込むように寄りかかっており、『月雫箱』の中にあるクロニクが離れたボルチェイブに念話を通すハブ、つまり触媒として機能している。
そして、木偶人形を通してクロニクからザイシャの置かれていた状況を伝達された老人は、偏頭痛でも痛むかのように頭を抱えて悩んでいた。
「そこからかぁ……。あー、ちょっとその辺は私には難しいかもなあ」
『左様ですか？』
「うん。私は魔力量自体は並の方だったからね。制御も感覚で覚えてしまったし、覚えたのも随分昔のことだから教導するのも難しいと思うよ？　十歳と言えば身体が出来上がる途中段階だから一歩間違えれば成長や寿命を歪める可能性だってある。死ぬかもしれない」
『雪仔を魔術師に育てるのは不可能だと？』
「そうとまでは言わない。だが、終点の魔眼で軽く覗いただけで実に十万もの滅びが視えた。それもほんの一部だ。あんまり滅びが飽和しているからここまで逃げて来たことからもわかるだろう？　私が手を加えてザイシャが一年以上保つ可能性は億分の一にも満たない。リスクが高すぎるのだよ。そう。私が妖精コリャダの血を受け継ぐ以上は看過出来ないほどに、ね」
『では、諦めるのですか？』
「いや、そのつもりはない。せっかくやる気を取り戻したんだ。計画は続行する。……まあ、なんだね。今回は運が悪かった、ということだ。きっと次はある。アンディライリーのように後継者からあぶれる魔術師だって他にいるだろうし、それでもダメならお前がいる。私の研究が無駄に終わることは無い。そう、信じることにするよ」
『……それでは、その場合ザイシャはどうされるのですか？』

「……そうだな。いっそ、お前の身体に使ってみるかね？　肉の器を手に入れれば何かとインスピレーションも湧いてくるかもしれない。うん。それがいい。そうしよう」
『……ハァ』
無感情な声が、深く、深く、溜息をついた。
『却下します。雪仔の身体を纏うなど考えるだけでも虫唾が走ります』
「おや、それではどうしようか。無為に殺してしまうのは私の血が許さない。せめて、形だけでも有意義に整えたいのだけどねえ」
『却下、と。否定を述べたのはザイシャの死体の使い道についてではありません』
「……ほう」
老魔術師は興味深そうな声を漏らした。
『私が思うに、お父様。ザイシャ以上に優れた個体が現れるとは考えられません。また、その出自と孤独を嫌う性格に由来するコントロールの容易さも優秀。二点を兼ね備えることを必要性として代入すれば、あれを手放すのは極めて非効率と言わざるを得ません。他選択の帯びた将来性・確実性とザイシャを大成させる難度を天秤にかければ後者が圧倒的に容易いかと』
「では、クロニク。私の愛し子にして我が写し身よ。君はどんな提案をしたいのかね？」
『提案しましょう。私にお任せくださいお父様。必ず、ザイシャを魔術師にしてみせます』
「その言葉を違えたならお前はどうする？」
『お望みのままに、ザイシャの身体でもなんでも纏って差し上げましょう』
「――――よろしい！　お前に任せようクロニク」
喜色に満ちた父の声を受け、ガチャガチャと音を立てる木偶人形。
ぎこちなく、それでいて恭しく老魔術師に向けて一礼する。
『承りました。お父様』
そして、クロニクの声が途切れると共に木偶人形は崩れ落ちた。
荒屋に残る人影はただ一つ。
爛々と、その瞳孔を光らせて。
「……そう。私が手を加えれば滅びの空隙は億分の一にも満たぬ。ああ。そうだとも……私が手を加えれば、ね」
滅びを見通し、時に人心さえ自在とする老獪な死徒は旧き住処でくつくつと笑う。
くぐもった笑い声を漏らしながら、『月雫箱』の魔力が通っていた木偶人形を見下ろした。
「ところで、クロニク。いつの間にかアレを雪仔と呼んでいなかった事に気がついたかね？
良い傾向だ愛し子よ。私の写し身でありながら、お前に私を父と呼ばせることで別個の人格として分化させ移植した魂を宿しこむことに成功した。だが、この私がどれだけ手を尽くそうと心や感情は獲得しなかった。そんなお前がやっと、それを手に入れたのだ。――素晴らしい。この上なく素晴らしいじゃないか！　くっくくくくくっ……ああ、人生とは本当に、面白い」

歓喜か、狂気か。その笑声は夜を徹して森の底に谺する。
「ああ、素晴らしきかな。――――これで、最後の駒も盤上に揃う」
そんな、誰かの声が、

□□

深夜、夢さえ見ない眠りに落ちていたザイシャの身体を何者かが乱暴に揺さぶる。
「誰……だ……？」
半分眠ったままに閉じられた瞼を薄く開けながら短い問いを投げつける。
その問いかけに、ガチャガチャとやかましく耳慣れた喧騒が答えた。
『起きなさい雪仔。あなたの魔術回路を調整しますよ』
「クロニク……？」
ザイシャを起こしたのはクロニクの操る木偶人形であった。
寝ぼけ眼と頭のままザイシャが疑問符のついた名前を呼ぶと木偶人形の動きが止まる。
「どうしたんだこんな時間に、それに調整って」
『言葉通りです。私が、あなたの、回路を調整してリバウンドの防止策とします』
「そんな、急に言われたって……それにロォスト殿からは魔術を使うなと！」
『お父様の許可は取っています。お早く』
「えっ……えぇ……？」
寝起きと唐突なクロニクの豹変のせいだろうか、ザイシャは目を回して混乱しているようでクロニクの促すままにベッドから立ち上がり木偶人形の後をついてくる。
『ここに手を置いてください』
木偶人形が指し示しているのはザイシャも見慣れた幾何学模様の箱。
クロニクの本体である礼装、『月雫箱』であった。
「……これは『月雫箱』じゃないか？　回路を調整するのではなかったのか？」
『いいですから。早く』
「いや、だって」
『早く』
「わ、わかった……」
何時になく語気鋭いクロニクに戸惑いつつもザイシャはそっと右手――魔術刻印が刻まれたほうの手――を『月雫箱』に触れさせる。
瞬間、同調開始という感情の薄い声と共にザイシャの意識が吸い込まれた。
気がつけば、真っ白な空間にザイシャは立っていた。
「ここ、は？」

『月雫箱』の頭脳。内在の海。フォトニック純結晶体。記憶。記録。覗き窓。呼び名の候補は様々ですが、私は単に『内側』と呼称しています」

聞き覚えのある無感情な声。

しかし、その音に距離と方向があるという事実がザイシャに酷く違和感を覚えさせる。

「ようこそ雪仔。『内側』へ」

「クロニク……？　いや違う、君は……私……？」

声のする方へザイシャが振り向くと、そこにはザイシャと全く同じ姿の雪仔が立っていた。

自分と瓜二つの人間が、ただ一つ声だけはクロニクのそれだということがアンバランスで、船酔いでもしたかのようにグラグラとした違和感が、どこか気持ち悪く思えた。

「私には決まった姿はありません。あなたが見ているのはあなたのセルフイメージ……失礼、あなたが思い描いている自己像を投影し視覚機能の不全を補完しているだけです。あまり気になさらずともよろしいかと」

「よくわからないが……とりあえず、君の本当の姿はそれではない、ということか？」

「間違いではありません」

さて、と鏡写しの雪仔が口火を切った。

「本題に移りましょう。あなたは現在、右手の魔術回路を通じて『内側』に接続しています。この状態を長く保つことは推奨しません。故に、あなたと接続を保てるリミットは約一時間。より正確に言えば説明終了予定時刻である三十秒後に五十五分十四・三秒の猶予を残します。私の算出したリバウンドの要因として最も可能性が高いものは魔術刻印が機能不全を発生させ適合者とのリンクを拒絶することによる魔術式の崩壊です。第二に魔力過多による制御不能については魔術回路の編成に異常が発生していることが予測されました。スキャン完了。以上の予測が正答であることが確定。対処プランを提示します。要因A、魔術刻印の不全。あなたの回路を経由し、身体保全機能にリソースを割かれ対侵入防壁が脆くなった刻印にハッキング、アクセスし先ほどスキャンしたあなたの身体データに合わせアンディライリーの刻印を書換えます。要因B、魔術回路編成の異常。この異常は後天的なものと診断されたため逆説的に本来の編成に回復し得る可能性を提示。二次スキャン終了。閉塞したままの回路が数本残ることが経脈に影響し異常をもたらしていると判断。強制的に回路を開き魔力の循環を正常化。以上。対処プラン提示終了。質問、または当処置を拒絶する場合は――――」

「待て！　待ってくれ！」

「なんでしょうか？」

「早すぎるし何を言っているのかさっぱりわからない！　……が、クロニク。おそらく君は、私を治そうとしているのだろう？」

「はい」

「何故だ？」

ザイシャの言葉に、ザイシャの影がコテリと首を傾げた。
「何故とは？」
「何故って……君が言ったことではないか！　私には最初から期待していなかったと！　それに君は私を嫌っていたはずじゃないか！　そんな君がどうして私を治そうと言うんだ！」
「あなたも、その答えはわかっているのではないですか？」
瞠目しながらザイシャの影が答えると、ザイシャは顔を伏せて――まるで、何かの甘い期待を噛み殺してしまうかのように――声を絞り出した。
「……ロォスト殿の、ためなのか？」
「あなたを助けたかったから、あなたのためだと、そう言って欲しかったですか？」
「……ッ！」
見え透いていたと、暗にそう言われてザイシャは言葉を無くす。
ギリッ。『内側』に噛み砕かんばかりの切歯の音が響いた。
「礼装、私はやはり君のことが嫌いだ」
「意見が合うとは珍しいですね、雪仔」
ザイシャの目に憎悪が燃え盛る。
「……何かとつけてお父様お父様と！　主体性が無いくせに知ったような口を聞いて！」
「主体性がないのはあなたもでしょう。同族嫌悪。違いますか、雪仔？」
「話を逸らすな！　だから私は、君のその口ぶりが嫌いなんだ！」
「また意見が合いましたね。私もあなたの感情的なノイズに侵された思考回路が嫌いです」
烈火の如く、あるいは氷雪の如く。二者は沈黙をぶつけ合う。
が、すぐさま影が馬鹿馬鹿しいとばかりに溜息をついた。
「やめましょう。堂々巡りです。さて、先ほど話したようにこれはお父様の意思です。つまりあなたにこの処置を受けない、という権利は存在していない。信用できない相手に受け継いだ刻印と自身の肉体を弄ばれたくないのはわかりますがここは大人しく――――」
「……それは違う。逆だ。私は、今の君をこの上なく信じている」
影の言葉に割り込んでザイシャが妙なことを言った。
「……？　別に、そんな嘘をつかずとも私はあなたを治しますが」
「違う！」
再び力強く否定し、ザイシャは影をまっすぐに見据えた。
「私は君が嫌いだ。判断を他人任せにしているくせに白々しく力不足を揶揄する君が嫌いだ。主体性が無いのは私もだと？　馬鹿馬鹿しい！　一緒にするな！　少なくとも私は選択した！本当は選ぶのを怖がっているくせに、さもそれが賢いような顔をして！　なにが、お父様だ！お父様お父様お父様……！　もう、うんざりだ！　少しは己に責任のある言葉を話せ！私は、君のそういうところが、心の底から大嫌いだ！」

だが、と言葉を区切り、無表情の影を睨みつけながらザイシャは右手を伸ばす。
「だからこそ主体性をロォスト殿に押し付けた今の君を信用する。甘く見るなよ礼装。私は、アンディライリー家当主だ。例え魔術が使えなくとも、そうあろうと私自身が選択したんだ。人の好き嫌いに信頼の有無を依存するなど以ての外。冷徹に、平等に、我を捨て最善を選ぶ。それが、契約魔術をその身に宿す当主の振る舞いだと、他ならぬ私が選んだが故に」
まっすぐと伸びた右腕は、ザイシャがまた一つ自ら選択したことを意味していた。
今の今まで憤怒に満ちていたように見えた赤い瞳はエゴを乖離させ、理性に澄んでいる。
影への否定はアンディライリー当主としての誇りのために。
そこに立っていたのは、齢十の幼い雪仔などではなく一人の魔術師であった。
「……なるほど。影、ですか」
やれやれとザイシャの影は頭を振る。
「完敗ですね。此度は負けを認めましょう。雪仔、あなたは正しく魔術師です」
「そして、魔術師にならなければならない。――――礼装、私を魔術師にしてくれ」
迷いのない、心底から信頼するまっすぐな瞳。
「承りました」
ザイシャと対照的に、ザイシャの影は静かにその手を取った。
同時に、ザイシャがその右手から0と1に還元されていき、その影もまた姿を投影する視点を失ったことで解けていく。
「目覚めた時にはあなたは魔術師。お父様の教えは生易しいものではありません。ですから。おやすみなさい、雪仔。今のうちに、甘く、楽しい夢を味わっていなさい」
「望むところだ、礼装。そしてアンディライリーの名に誓おう。いつか、この恩は必ず返す」
強い意志を宿した瞳が最後に数式に変換され、観測者を失った『内側』は光を失い虚とも闇とも取れぬ場所へと姿を変えていく。難攻不落かつ繊細至極な魔術刻印へのハッキングに向け、クロニクの自我もまた計算領域の一部として『内側』の中に溶けていった。
……そして、残った苛立ちはやはり自分の感情で。
わかっていた。この怒りが内向きであることも、発端が雪仔への罪悪感ということも。
クロニクはザイシャの身体を治すことで初めて覚えた罪悪感を解消しようとしていたのだ。
怒りは思うようにならないザイシャへのもどかしさと、同時に、こんな方法で一方的に禊を晴らそうとしていた自身への憎悪から湧き出たもの。
なんて、勝手で卑怯なのだろう。笑ってしまうほど滑稽な独りよがり。
奪った未来と与えた未来が等価でないことは、とっくに知っていただろうに。
それでも、と。
――――これで、あなたから奪ってしまったものを少しは返せたのだろうか？
語る先を持たぬ問いは、計算領域に飲まれて消えた。

□□

乾いた軋みが早朝の森に響いた。
音の源はザイシャが両手で抱えた一本の薪。それが、太い木の枝をへし折った音だった。
「やった、やったぞ！　見ろクロニク！　私もちゃんと使えた！　魔術師になれたんだ！」
感涙寸前の喜び様のザイシャ。が、クロニクの冷ややかな声がそれに水をかける。
『強化魔術程度で何を喜んでいるのですか。確かに物体、人体ともにリバウンドの兆候すらも無く発動できていましたがあくまで基礎の入り口に過ぎないとわかっていないのですか雪仔。全く、これだから雪仔には困ったものです』
「な、なんだとっ！　……いいだろ喜んだって。初めてまともに魔術を使えたんだぞ！」
ほら！　とザイシャはもう一度刻印を励起させ薪を強化してみせる。
二度目の軋み。先ほどより重いそれはより太い枝を折ったと教えている。
が、クロニクはそれを無視して、
『しかし魔術師、ですか。お父様の領域に達せねばその呼称を当てるのは気が引けますね』
「待て礼装！　この前、私のことを魔術師と認めてくれたのは嘘だったのか！？」
『ああ、そうですね。魔術師は魔術師でもへっぽこが頭につきますが』
「君はまたそんな屁理屈を……！」
礼装！　雪仔！　礼装！　雪仔！　と、いつもの騒がしさが寂しい村外れの小屋に響く。
だが、気のせいだろうか。
その喧騒は少しだけ、以前よりも楽しげに聞こえた。